

インドネシアのテレビ番組が描く女兒像 グロリア・アーリニ（シンガポール）

シネトロン（sinetrons）とは連続ドラマのことで、インドネシアではとても人気があります。メロドラマで、ストーリーのほとんどは、家族内の複雑なドラマや男女の三角関係をテーマに展開します。その波乱万丈の物語や家庭内の陰謀策略の真ん中に置かれるのはたいていの場合若い女性で、そのヒロインはさまざまな苦難に遭遇しながらもハッピーエンドで終わります。

インドネシアで現在人気のある女優の多くは14~18歳で、国連標準でもインドネシアの法律でも未成年に当たります。つまり、インドネシアの電子メディア上の中心にいるのは少女ともいえる未成年で、シネトロンで描かれる少女たちの姿が、国内娯楽文化の普及とともに、大衆の認識を強く形づくるものとなっています。しかし、残念なことに、その描かれ方はあまり前向きなものではありません。

シネトロンの主人公の典型は、親切で、物静かで、謙虚な、信心深い美少女で、その辛い「人生」にもかかわらず、決して自分を虐待した人たちを憎んだりしません。声に出さず涙で耐え続ける彼女たちの姿に、視聴者は暗黙のうちに、それが「良い」女の子の姿だと思うようになります。運命に対してサバール（sabar：忍耐強い）でパスラ（pasrah：諦める）な徳をもち、そのような高い徳は神によって報われるという信念を捨てない少女こそがすばらしいと思ひ込むのです。ストーリーでは、「最後には善が悪に勝つものなので、少女たちは辛抱強く待つべきだ」という教訓で一貫しています。

女兒は弱くて受け身で虐待されるものであるとして描かれることは、女性のエンパワーメントを妨げ、アジア社会で「弱き性」としての女性という固定観念を決定的なものにしてしまいます。多くのシネトロンで示される、女兒が自己防衛する自発性や、強さ、能力の兆しは、仮にあったとしても、ごくわずかです。そのかわり、少女たちは男性主人公に庇護され、これがまた、男らしいヒーローとしての固定観念を決定的なものにします。シネトロンによく登場する男性は成功した若い男性で、下層出身の女性と恋に落ちます。対照的に、女性の方は、そういった力のある男性との出会いを通じて一瞬にして成功者になる、路上の物売り、家政婦、会社の清掃員などの低い社会階級に属している人物として配役されます。

強い男性と対比させて、少女を身体的、社会経済的意味において弱く描くという一貫した方法はあまりに固定的です。女性の登場人物は、自身の努力ではなく、人生における男性との関わりで「成功者」になるのです。女性を男性に依存させる配役や人物像が、少しずつしかし確実に、性別による固定観念を形成し、差別を生じる土台となっていくのです。

最近のシネトロンでは、もっと元気で、活発な、自立して屈託のない少女たちを登場させるなど、少女の描き方がかなり多様化してきました。ストーリーのもつ教訓も、相変わらず親切や正直といった価値観が強調されてはいますが、前向きな姿勢こそが困難に打ち

勝つのだ、という風が変わってきました。また、少女たちははっきり意見を述べたり、正義や権利を求めて戦ったり（文字通り、あるいは比喩的に）、学校や、遊び、仕事で男の子と競い、彼らを凌いだりするなど、より勇敢に描かれるようになってきました。

けれどもそれは、ヒロインたちが 8~15 歳と若い場合で、風変わりな行動や熱心さは子どもらしい純真さと無邪気さからくるものです。それが十代後半になり、登場人物たちも年齢が進んでいくにつれ、自身の権利を求める元気よさや強さが削り取られていくように思えます。これは、女の子は男の子に比べても勇敢だし、競争もできるという描き方から後退して、大人の入り口に近づくにつれ従属的になるべきだというメッセージを押し出すものです。

女性と女性が持つべき望ましい特性の描き方がこのように一貫していないため、インドネシアにおける女性差別の軽減には何の役割もなすことがありません。国家レベルや、草の根レベルで女兒の差別撲滅に取り組んでいるにもかかわらず、シネトロンを通じたメディアにおける女兒の描き方が、男性中心社会で少女は自分の運命に従い受け身でいるべきだとするメッセージを流し続けているため、それらの取り組みの土台を徐々に蝕んでしまっているのです。

メディアはインドネシア国内、特に都市部での浸透力が大きく、そこで繰り広げられるストーリーによって国の世界観が形成されるといっても過言ではありません。女兒と女性を弱く無力なものとして描くインドネシアでは、女性に対する差別や搾取を排除するという公約実現への道は程遠いと言えるでしょう。